

神戸南京町の形成と変容

高橋正明
于 亜*

はじめに

世界の大部分の国々は複合民族国家であり、大都市を中心として様々の民族によるすみ分けが進んでいる。各地に住み着いた民族は独特の生活文化を移住先に持ち込むことによって、特異な景観をもつ町を形成していった。チャイナタウンはその代表的なものである。

アメリカ合衆国オレゴン州ポートランド市において、アジア系の移民の中で最も集中して居住するのがチャイナタウンの中国人、次いでコリアタウンを形成している韓国人、日本人は前二者に比較して人口の集中する割合が少ないことが指摘¹⁾されている。

「海水の至るところ華僑あり」といわれてきたように海外に居住している中国人の数は3000万人に達するとも言われている。居住地の住民と競合することの少ない職業を選択することによって形成されたチャイナタウンは、近年は観光地として脚光をあびつつあ²⁾る。

神戸の南京町は横浜中華街に次ぐ中国人街として、また神戸を代表する観光地として注目を集めるようになった。神戸中華街は近代日本とともに歩み、昭和20年の神戸大空襲、平成7年の阪神大震災では甚大な被害を受けたが、その都度見事に蘇ってきた。

筆者は地域の活性化について研究を進めてきたが、今回は中華街を取り上げることにした。本稿では、若い女性に人気のある神戸南京町の形成と変容を街づくりの観点から考察するとともに、女子学生のアンケート調査から南京町の魅力と問題点について明らかにしたい。

* 大手前女子大学非常勤講師

I. 南京町の形成

1. 神戸開港と中国人

神戸開港は1868年（明治元年）であった。当時の中国人は主として長崎から移住してきた広東、浙江、福建出身の十余人であった。彼らはランプと灯油を持って、貿易目的で来日した。その頃、旧生田区の海岸に外国人居留地が設置された。しかし、日本と条約を締結していなかった清国人が居留地に住むことは出来なかった。

このために在留清国人⁴⁾は外国人居留地の境界西隣で元町の南（海岸栄町通り1、2丁目辺り）に集中して住居を構えた。この辺りは外国人居留地ではなく雑居地であったが、港や居留地に近く大変便利な場所であった。

当時の南京町について、鴻山俊雄は次のように説明している⁵⁾。「この辺りには、長屋のような民家や酒蔵などもあったようだ。ここへ地主、家主から借り受けて清国の商人らが狭い一角に集まり、明治10年頃にはすでに南京町とよばれ始めた。」この町のいくつかの狭い路地に雑貨商、豚肉商、飲食店、漢方薬店等様々な店舗が軒を並べ、このほか塗装職、洋服職、船員等雑業の職人達が雑居して、中国人の町のようになった。

第3図のように明治末期より大正初期の南京町にある店舗は100軒余り、その中で中華料理店は6軒、豚肉店は5軒（中国人経営は3軒、日本人経営は2軒）、雑貨店4軒があった。当時の中国人は支那人あるいは清国人と呼ばれ、中華料理店も支那料理店と呼ばれていた。多くの中国人はこの町で商売をしながら生活していたが、その活躍ぶりが想像できる。南京町の発展は昭和に入って一層盛んになり、どのような物でもある商店街となった。

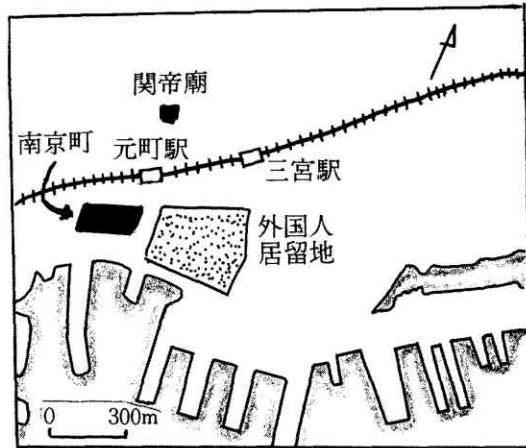
しかし、中国人特有な自強自立な性格によって、貿易商売で賑わうこの町は風なき波静かな状態ではなかった。『神戸開港三十年史』下巻、に「明治20年には賭博の大流行を来たし、栄町なる南京町には、支那人の住家して賭博たる者数戸ありて博徒を拿捕すること、一網四十、五十名に及ぶ有り様なり⁶⁾」と記録されている。当時の一部の中国人の生活の貧しさ、本国を離れている寂しさ、気配の頹廃を推測できる。

1912年（大正元年）、清朝崩壊、中華民国の成立とともに支那人、清国人を中国人、支那料理店は中華料理店と呼ばれるようになった。そのころの中国人は台湾人を除くと3分の1が広東人、続いて江蘇人、福建人が多かった。豚肉商、飲食店、漢方薬店の経営者は福建人が多く、中華料理店は広東人、理髪店は江蘇人、洋服店は江蘇、上海周辺の人が従事した。油っこい湯気、漢方薬草のにおい、野菜、果物の香りなど、南京町は独特のにおいをただよわせながら全盛時代を迎えた。

しかし、第2次世界大戦のアメリカ軍の空襲によって焼失したこの町は凄涼の景象を

神戸南京町の形成と変容

呈していた。多くの中国人は帰国して中国人店舗も次々と消えていった。闇のような時代がしばらく続き、外国人般員相手のバーも急増した時期もあり、ベトナム戦場からの帰休兵の乱闘騒ぎが絶えず、一般の観光客はこの町を訪れなくなった。中華料理店もたった1軒「民生」が黒雲に立ちこめられているこの町で建闘しながら、この衰退の時代に落ち込んだ南京町の復興をひそかに待っていたのである。



第1図 神戸南京町位置図

2. 在神戸中国人人口の推移と居住地分布

(1) 在神戸中国人人口の推移

在神戸中国人の人口が神戸市統計書に最初に記載されたのは明治34年（1901）のことである。

第1表のように、その頃、清国人として在神戸の中国人が1,767人となり、神戸外国人

第1表 在神戸中国人の内訳

年 代	人口	年 代	人口
明治34 (1901)	1,767	昭和22 (1947)	3,688
明治35 (1902)	1,875	昭和25 (1950)	6,841
明治36 (1903)	1,951	昭和30 (1955)	7,486
明治37 (1904)	2,050	昭和35 (1960)	7,459
明治38 (1905)	1,959	昭和40 (1965)	7,951
明治39 (1906)	2,262	昭和45 (1970)	7,930
明治40 (1907)	2,288	昭和50 (1975)	7,294
明治41 (1908)	2,165	昭和55 (1980)	7,244
明治42 (1909)	1,965	昭和60 (1985)	7,275
明治43 (1910)	1,700	昭和61 (1986)	7,264
明治44 (1911)	1,428	昭和62 (1987)	7,369
大正 1 (1912)	2,254	昭和63 (1988)	7,311
大正 5 (1916)	2,639	平成 1 (1989)	7,770
大正14 (1925)	5,122	平成 2 (1990)	8,095
昭和 5 (1930)	6,636	平成 3 (1991)	8,357
昭和10 (1935)	5,576	平成 4 (1992)	8,753
昭和15 (1940)	4,299	平成 5 (1993)	9,155
		平成 6 (1994)	9,415

(「神戸市統計書」による)

神戸南京町の形成と変容

人口の3分の2近くを占める⁷⁾。このような点から見ても当時、中国人の日本進出の激しさがわかる。

その後、明治44年までの十年間は中国人の日本進出は明治40年(1907)の2,288人を最高にそれほど大きな変化は見られなかった。しかし、大正年間に入ると激増する。大正元年(1912)2,254人、5年2,639人、そして大正14年には5,122人に倍増している。このため中国人は当時在神戸外国人総数の71.2%と圧倒的多数を占めるに至った⁸⁾。この時期に神戸に中国人が急増した理由としては、大正12年の関東大震災により横浜から神戸に多くの中国人が移住したことがあげられるだろう。

昭和12年の日中戦争の勃発によって、多くの中国人が戦争の苦しみに耐えきれずに帰国した。その頃が在神戸中国人人口が一番少ない時期である。終戦後、中国人の日本進出の意欲は再び燃え、帰国した中国人も神戸に戻り、在神戸中国人の人口は昭和25年には6,841人に達した。ところが昭和24年(1949)中華人民共和国の誕生に伴い、これ以後の中国人の日本進出はほとんど停止の状態になっている。したがって、昭和25年から47年、日中国交正常化まで在日中国人の人口の変化は大きく変わらなかったが、中国人の日本定住化を加速させた。しかし、80年代末期に中国の改革開放政策が実施されて以来、中国人の日本進出の門戸は再び大きく開かれた。留学、就学、観光、ビジネス、芸術、技術の交流などで多くの中国人が日本を訪れ、在日中国人の人口は大幅に増加することになった。第1表のように在神戸中国人人口の増加も著しく、平成6年には9,415人に達した。

第2表 在日中国人の人口(平成7年度)

永住者	22,583	中 期 滞 在	興行	835	特 定 の 在 留 資 格 者 等	就学	27,763
特別永住者	4,798		投資経営	508		定住者	28,382
短期滞在	5,232		文化学術	1,646		特定活動	1,569
その他	225		留学	35,014		日本人の配偶者	35,058
			宗教	50		永住者の配偶者	817
			教授	949		法律、会計業務	4
			研修	9,711		医療	143
			報道	21		研究	645
			技術	6,294		教育	73
			芸術	102		人文、知識、国際業務	8,422
		家族滞在	21,304	企業内転勤	1,068		
				技能	3,654		
				未取得者	1,715		
小計	32,838		小計	76,434		小計	109,313
						合計	218,585

(法務省「在留資格別、外国人登録者、その2中国」による)

神戸南京町の形成と変容

第2表によると日本における永住者数は1995年には27,381人でこれは全体の218,585人のわずかに12.5%にすぎない。この永住者は華僑であり、これ以外の87.5%が短、中、長期の一時在留者である。在留者で一番多いのは留學生が35,014人で、就學生の27,763人を合わせて63,777人(29.2%)である。このような多くの留学、就學生が大陸、台湾、香港から来日することは、日中交流史上に未曾有なことである。ところで、第3表のように永住者を都道府県別にみると、兵庫県が6,549人と最も多く、次いで東京5,474人、大阪3,965人、神奈川3,349と続く。国際都市神戸の面目躍如と言ったところである。

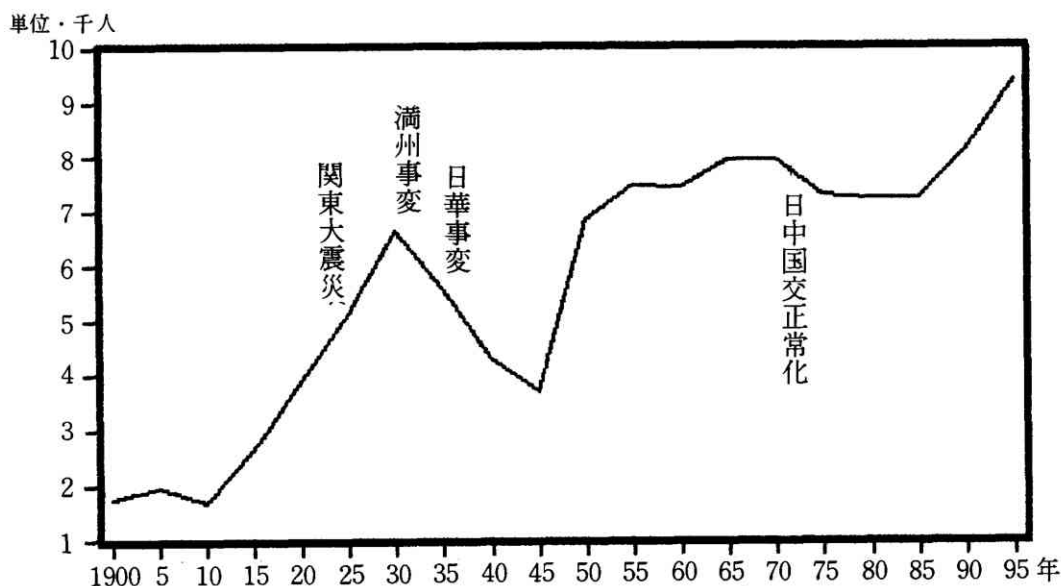
第3表 永住中国人の多い府県

府 県	永住人口
兵 庫 県	6,549人
東 京 都	5,474
大 阪 府	3,965
神奈川 県	3,349
千 葉 県	853

(出典は第2表と同じ)

(2) 居住地の分布

第4表をみると大正時代から現在に至るまで、在神戸中国人の居住地の分布には大きな変化は見られなかった。1930年の在神戸中国人の居住地は南京町を中心に、さらに JR 北側の山手方面に広く分布しており、95%までが現在の中央区に集中していた。中央区は神戸の中核であり、神戸港、居留地と近接している上に、都心の三ノ宮、元町の周辺に繁華な商業地帯がある。居住環境からみれば便利で恵まれている居住地である。さらに中国系寺院の関帝廟、中華同文学校、神戸華僑総会も中央区に設立し、このように南京町の周辺に集中している。在神戸中国人の住居および団体施設が中央区に集中している理由としては①、当初形成された居住地(居留地、雑居地)、②、港湾都市としての貿易上の優位性、③、都心に近接する立地上の優位性などがあげられるであろう。第4表の平成5年における在神戸中国人の居住傾向を見ると、周辺地域への分散傾向があると



第2図 在神戸中国人人口の推移 (神戸統計書による)

神戸南京町の形成と変容

第4表 在神戸中国人の居住分布の推移

㉑ 地 域		大正7、8年		㉒ 地 域		昭和3年	
神戸警察署		2,774 人		葺合警察署		309 人	
相生警察署		238		三ノ宮警察署		4,239	
兵庫警察署		41		相生警察署		605	
葺合警察署		87		湊川警察署		136	
湊川警察署		43		兵庫警察署		53	
須磨警察署		26		林田警察署		103	
合 計		3,209		須磨警察署		52	
				合 計		5,497	

㉓ 地 区	昭和29年	昭和41年	昭和60年	平成2年	平成5年
東灘区	88	199	395	449	558 人
灘 区	634	914	687	741	866
葺合区	740	904			
中央区	4,774	4,790	4,534	4,634	4,861
兵庫区	574	577	491	576	753
長田区	391	351	380	471	501
北須磨区				(158)	(158)
須磨区	117	95	214	309	324
西区			50	160	307
垂水区	85	53	333	431	580
北区			191	324	405
合 計	7,403	7,883	7,275	8,095	9,155

(神戸市統計書による)

は言え、やはり中央区に圧倒的に多く居住していることがわかる。

II. 南京町の発展

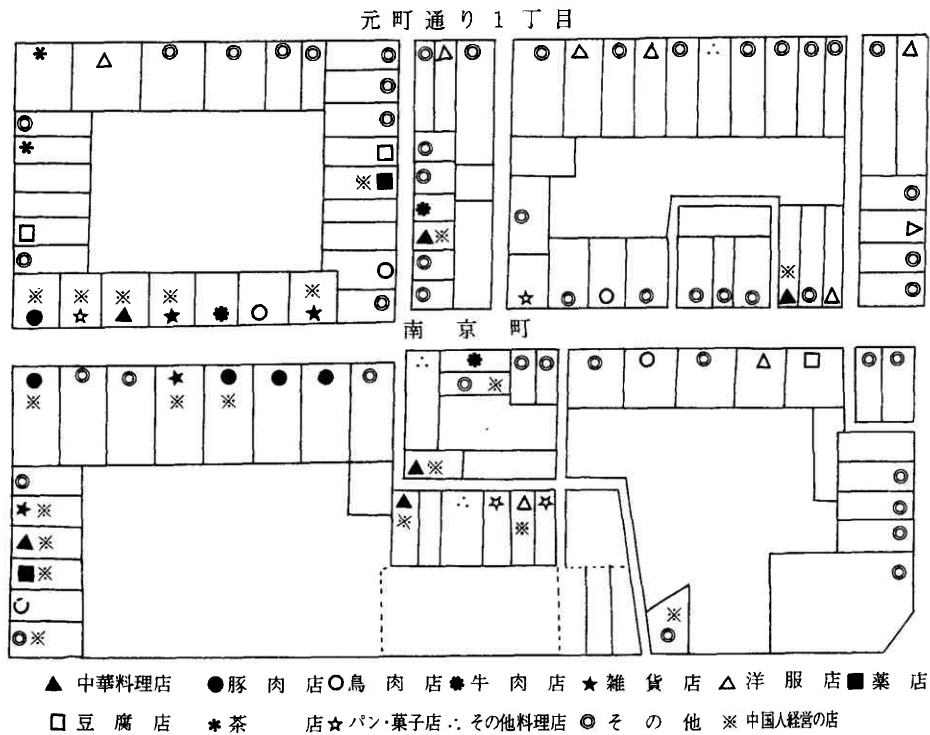
1. 再興の動き

第二次世界大戦によるアメリカ軍の空襲によって大きな被害を受けた南京町が、本格的な復興に向けて歩みを始めたのは1970年代の後半のことである。

1970年代後半、「南京町を考える会」が設けられ、南京町の活気とその独特の風情を再興しようとするムードが地元を中心に高まっていた。この復興の動きは神戸市当局をも動員し、国際港都市神戸の新名所にふさわしい、中国風な景観に満ちた街づくりをバックアップするという方針が決定された。そして1977年7月10日には地元の商店主達が「南京町商店街振興組合」を設立し、本格的な再興が始まった次第である。

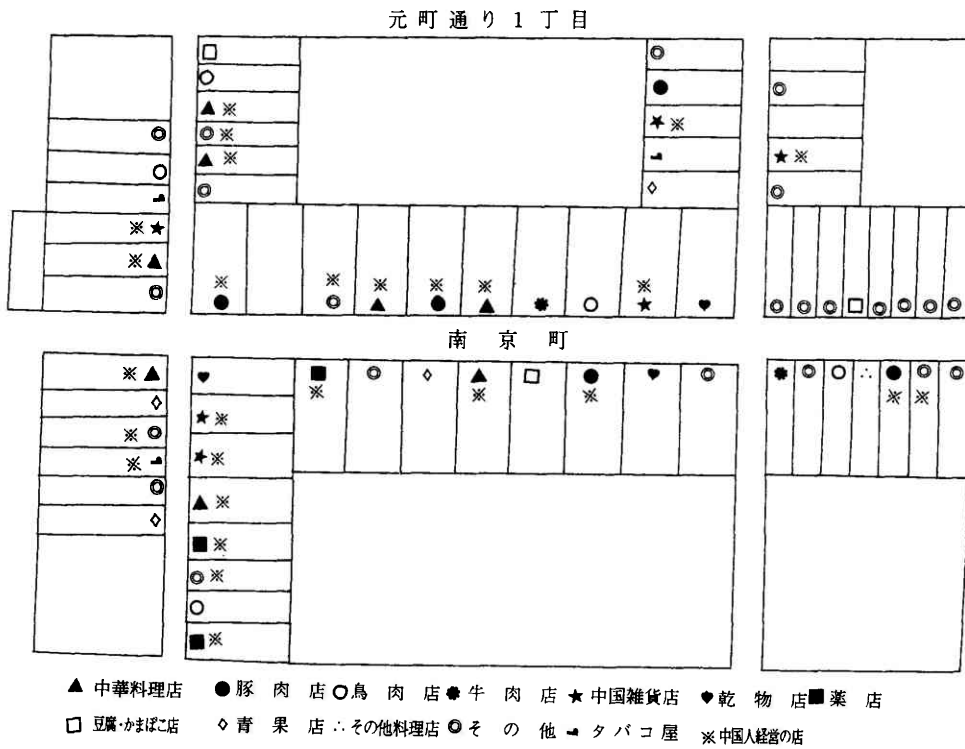
1982年に環境整備事業実施計画がまとまった後の街の変化は著しい。すなわち1982年

神戸南京町の形成と変容



第3図 明治末期より大正初期の南京町の店舗の分類

(岸 百舛「南京町の半世紀」歴史と神戸、第2巻別冊1、1963より作成)



第4図 昭和10年(1935)の南京町の店舗分類

(神戸華橋歴史博物館の資料から作成)

神戸南京町の形成と変容

に南京町の街路整備、中心部の広場整備に着工(83年完工)、1982年南楼門、1983年あずまや、1985年東楼門が相次いで完成した。そして、1987年南京町に新しいシンボルとして中心部の広場に中国風電話ボックス、1988年南京町北口に一对の中国獅子像(大理石製)を設置した、さらに1989年南京町広場に12支の石像を設置、1993年南京町会館「臥龍殿」の竣工をみた。これら一連の南京町再興の動き、美しい町づくりの推進に尽くした努力に1986年兵庫県知事より「まちづくり功労賞」を贈呈された。また1990年、南京町とその周辺が景観形成地域に指定された。⁹⁾

以上のように南京町商店街組合の成立以来の9年の間に10件の大きな事業が完成した。この再興の動きを支えたものは、日本一の中華街を目指す地元の人々の努力と信念の賜物であった。

2. 店舗の多様化

南京町の商店街の業種構成はどのように変化してきたのであろうか。第5表～第7表は明治末期、昭和10年頃、そして現在に至るまでの南京町店舗の種類を比較したものである。まず明治末期から大正初期にかけては総店舗数100軒余りの内、中国人の経営は21軒であった。中国料理や豚肉店の他に、中国人の得意とした雑貨店・漢方薬店などがあつた。また陶器、靴店などのほか建築・左官などの職人(3人)も居住しており多様な店舗が展開していた。

一方昭和10年頃¹⁰⁾には、総店舗数は66軒と減少したが、中国人経営の店舗は27軒と6軒増加し、中国人が南京町における地位を固めていった。その内訳は中華料理店7軒、雑貨店6軒、豚肉店4軒、理髪店1軒、漢方薬店3軒などであった。その他八百屋、豆腐屋などの39軒はほとんど日本人経営の店であった。

さて60年後の現在の南京町の店舗数、種類は大きく変わった。総店舗数121軒の内、中国人経営者は53軒、中華料理店の数は約

第5表 明治末期より大正初期の南京町の店舗分類

	中国人	日本人	合計
中華料理店	6	0	6
豚肉店	3	2	5
鳥肉店		5	5
牛肉店		3	3
和・洋服店	1	8	9
雑貨店	4	0	4
陶器店		3	3
建築・左官		3	3
パン菓子	1	3	4
靴屋		4	4
豆腐屋		3	3
日本料理店		3	3
八百屋		3	3
両替店	1	2	3
煙草屋	1	1	2
酒屋		2	2
洗濯屋		2	2
漬物、乾物店		2	2
米屋		2	2
薬屋	2	0	2
洋品店		2	2
茶舗		1	1
その他	2	26	28
合計	21	80	101

岸 百舛「南京町の半世紀(補遺)」「歴史と神戸」第2巻 1963年から作成。

神戸南京町の形成と変容

第6表 昭和10年(1935)の店舗分類

	中国人	日本人	合計
中華料理店	7		7
豚肉店	4		4
鳥肉屋		3	3
中国雑貨	6		6
豆腐、かまぼこ		3	3
魚屋		1	1
理髪店	1		1
漢方薬店	3		3
たばこ屋	1	2	3
漬物屋		2	2
青果店		4	4
米屋		1	1
乾物屋		3	3
その他	5	20	25
合計	27	39	66

(第4図より作成)

第7表 現在の南京町の店舗の分類

	中国人	日本人	合計
中華料理店	28	2	30
ラーメン・ギョーザ		5	5
日本料理店		9	9
西洋料理店		3	3
インド料理店		1	1
韓国料理		1	1
中華材料店	8	3	11
喫茶店		5	5
豚肉店	4		4
鳥肉店		1	1
魚店		3	3
茶・酒店	1	3	4
薬店	2		2
豆腐、かまぼこ		2	2
中国雑貨	7	1	8
日本雑貨		4	4
菓子・パン店		3	3
理・美容		6	6
その他	3	16	19
合計	53	68	121

(南京町商店街業種構成一覧表および聞き取り調査による)

3倍に増え、中華材料店は倍増した。また雑貨店の多くは中国人の経営である。喫茶店、レストランなどは日本人の経営が多い。

第9表で明らかなように、現在の南京町のE地区の店舗は中華料理と雑貨店がほとんどであり、近年にオープンした店舗ばかりあるが、老舗に負けず、観光客の行列が出来るほどの盛況ぶりを見せている。

南京町の中華料理の飲食店が増えたのはここ10年ほどのことである。広東料理「民生」、豚饅頭の「老祥記」などの老舗は興旺健在、多くのお客さんを長い間魅了し続けている。一方、これらに対して「長江」、「敦睦」などの新店舗も次々に登場した。かつては、中華料理と言えば広東料理が代表的なものとして、南京町で人気を集めていた。今日の南京町では広東料理はもちろん、四川料理「長江」、台湾料理「攤販街」、北京料理「鹿鳴荘」、上海料理「上海飯店」、飲茶専門店「敦睦」などの本格派中国料理店が軒を並べ、まさに百家鳴争、これが関西周辺の観光客を強く引き付けている理由となっているのである。

ここで南京町の代表的な老舗「老祥記」のことについて若干ふれておこう。

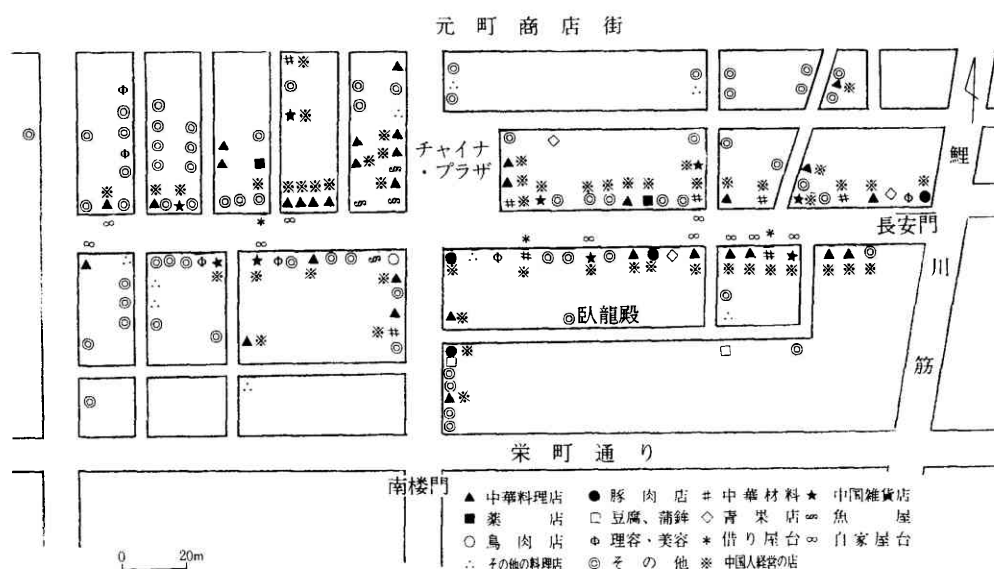
神戸南京町の形成と変容

南京町のへそと言われるチャイナプラザに面している豚饅屋「老祥記」は大正4年(1915)創業以来、81年の歴史を誇る老舗である。主人の曹穂昇氏が13歳のとき、中国浙江省寧波出身で「老祥記」の創業者の父を亡くし、母がこの店を引き継いだ。2代目は子息、そして孫の曹英生氏が三代目となる。

豚饅は中国語で「包子」と言う。「老祥記」の豚饅は普通より小振りで直径4,5センチぐらいである。毎日開店からすぐ長蛇の列ができ、最長待ち時間が5時間という記録が残ったことがある。創業以来、母、子、孫、三代にわたって豚饅ひと筋で高い人気を守っている。その秘密は一個一個すべて手作りである。饅頭の皮から中身まで家伝の麺、材料や醗酵のさせ方、秘伝の味つけで「老祥記」豚饅の独特な飽きのこないあっさりした味を築き上げた。「10個」「20個」「50個」といったまとまった注文が多くあり、いくら作っても追い付かない状態が続く毎日である。

度重なる苦難を乗り越え、南京町に生きるこの老舗は、この町を支える大きな存在であり、その魅力、その美味しさは南京街の名物として愛されている理由である。

ところで中華料理店を中心として繁栄している南京町において、雑貨店も多様化しつつある。中国雑貨専門店「好好」、香港風雑貨店「青年華人工廠(ヤンチャイ、ファクトリー)」、南米・アフリカ・アジアの雑貨を集めている店(カラカラ貿易)、英国紳士服専門店「インバネス」、箸と箸置き専門店「箸屋」、イタリアやドイツの弦楽器を集めている店「アルチザンハウス」など。これらの雑貨店に個性的、色々な国のおもしろい品物が溢れるほど南京町は賑わう。



第5図 現在の南京町の店舗の分布

(南京町商店街の資料と現地調査 <1996年9月1日> により作成)

神戸南京町の形成と変容

第5図のように南京町は時代とともにその姿を変えつつある。料理店は単一の広東料理より北京、上海、四川料理が加わり、さらにインド料理店、韓国料理店も開かれている。雑貨店、中華材料店、タイの野菜、インドネシアなどの東南アジア各国、あるいはアメリカの食材を扱い、中国一色ではなく、多国籍の商品が並ぶようになっている。この南京町は自己民族の特色を固守すると同時に、混沌とした多様性を内包しつつ、一種独特の異世界を形成していると言えよう。

3. 来街者調査について

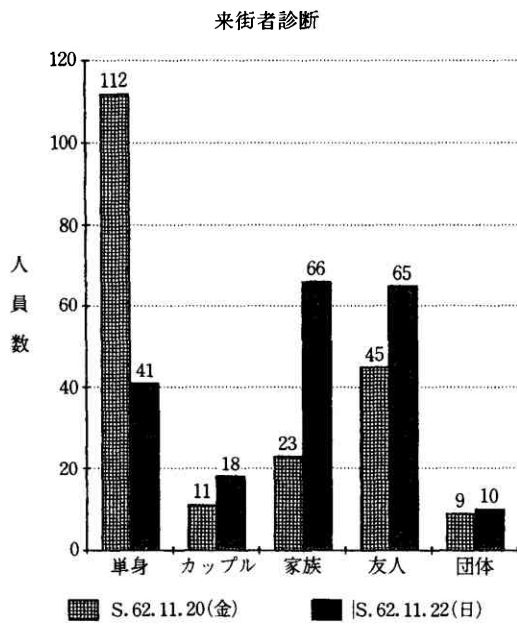
南京町は神戸観光名所として毎日多くの観光客を迎えている。ここでは昭和62年11月20日（金）と昭和62年11月22日（日）に調査された資料をもとに観光客の行動実態を明らかに¹⁾しておこう。

(1) 客流量 第6図のように平日は通勤者が多いため、単身者が多い(56%)。土、日曜には家族連れとカップル(42%)、友達連れ(32.5%)が大幅に増加する。また、30代、40代の家族連れの来街者が特に多い。

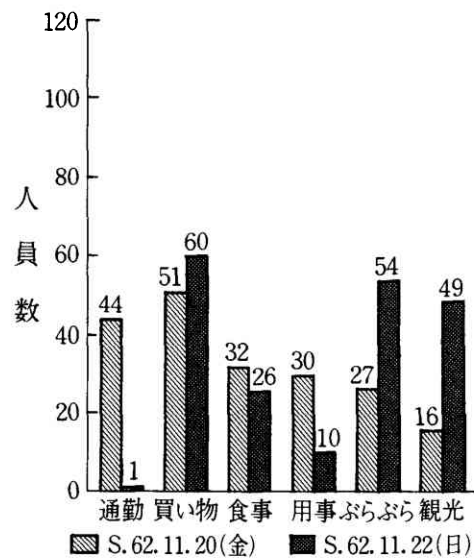
(2) 来街目的 来街の目的はそれぞれ異なる。日曜には、観光のための来街者が倍増する。(平日21.5%→51.5%)、とくに10代、20代が目立つ。買い物、食事、喫茶の割合は平日41.5%→日曜43.0%でありあまり差はみられない。50代、60代は買物目的が多い(第7図)。

(3) 男女別来街者

いかなる観光地でも、女性の動向は最も注目される場所である。南京町でも日曜日



第6図 来街者



第7図 来街目的

(南京町振興組合診断調査による)

神戸南京町の形成と変容

第8表 男女別来街者

調査日	S. 62. 11. 20 (金)			S. 62. 11. 22 (日)		
	男	女	計	男	女	計
北入口	1,880	1,997	3,877	3,168	4,199	7,367
東入口	1,840	1,558	3,398	2,787	3,772	6,559
西入口	970	633	1,603	1,580	1,423	3,003
南入口	1,911	1,151	3,062	1,052	1,005	2,057
合計	6,601	5,339	11,940	8,587	10,399	18,986

(南京町振興組合診断調査による)

には女性の来街者が急増する。すなわち、平日の5,339人から、日曜日には10,399人へと倍増するのである。第8表を見ると女性が来街者総数に占める割合は、平日には44.7%であるのに対して、日曜日には54.8%になる。女性をターゲットにした街づくりの進め方がより一層重要になってくるであろう。

III. 南京町の社会の特色

1. 春節祭 (旧正月)

旧暦の1月1日に行われる春節は中国人にとって、日本人のお正月のように年中行事の中で最も大切な伝統的な節目である。南京町の春節祭は1987年に始まり、9回開催された。催しものとしての舞龍(龍踊り)は香港から購入されたもので、日本一の長さを誇る。40mの雄龍と25mの雌龍が南京町の心意気を込めて舞龍隊の手で本物の龍の様に舞い、町を駆け抜け、観光客とともに盛り上がりを見せる。

「舞龍」とは北京語で「龍舞」、「龍灯舞」、「舞龍灯」とも呼び、中国漢民族と一部の少数民族の民間踊りである。最初は神を奉るための踊りであったが段々と民間芸能として中国全土に広がっている。「龍」は中国古代神話の中に神聖な動物として崇められる。春節祭に舞龍を行うことは、豊作を祝い万事順調を祈る意味もある。南京町の「春節祭」はこの舞龍だけでなく、神戸華僑総会青年部舞龍隊の獅子舞(獅子踊り)、少林寺拳法、太極拳、八極拳、または神戸中華同文学学校生徒による中国舞踏などを披露したり、上海、広東、天津、台湾から雑技団を招き毎回、約30万人の観光客を動員し、神戸の南京町の知名度は一挙に上がることになった。この「春節祭」は国際港都市神戸を代表するお祭りの一つとしてその意義も深い。

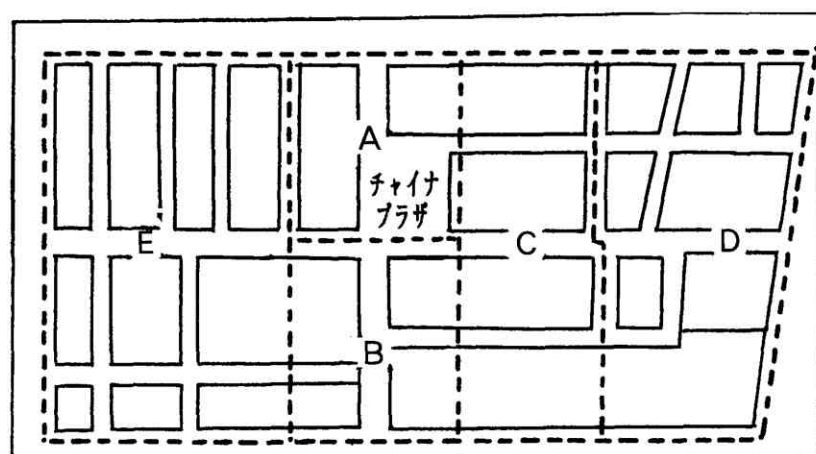
日本という外国の町にこの異質の文化、風俗・習慣並びに芸術をそのまま保存して生きて行くと言うことは南京町の誇りであり、南京町の人々の南京町への愛着、抱負でもある。年1回の「春節祭」の開催は単なる祭り、あるいは観光客を集める方法ではなく、南京町の再興に伴った民族文化再興の動きとも考えられるのである。

2. 通用語は北京語

昔、南京町に住んでいた中国人は広東、福建、江蘇、浙江などから移住した人々が中心であった。彼らは日本語も北京語も出来ず、「家郷話」の広東語、福建語を「通用語」として話し合い、交流していた。作家の陳舜臣は『神戸ものがたり』の中で次のように書いている。「母親は日本に五十年も住んでいたのに、死ぬまで日本語がうまく話せなかった。南京町で買い物をするので日本語を覚える機会がなかったのだ¹²⁾」。日本語も北京語も話さなくても暮らせる世界であり、神戸と言う大都会にある南京町は彼らにとって同郷出身者の強い絆の中で暮らしてきたからであった。ところが彼らの子孫すなわち第二、第三世代の青年層は日本で生まれ、育った彼らは日本語はもちろんのこと北京語も「家郷話」(方言)もできる。外で日本語を話し、中華同文学校で美しい北京語を教えられ、家で両親と家郷話で話す。

南京町唯一の飲茶専門店の主人である鮑悦凱氏は流暢な北京語でこう話してくれた。「両親は広東語しか出来ないのので小さい頃から広東語で育てられ、中華同文学校で北京語を学んだ。日本語は日本人の友達から又は高等学校、大学で教えてもらった。」

北京語は中華料理店はもちろん雑貨店、漢方薬店、中華材料店にも通用する。それはまた、日本人経営の店にも通用する。と言うのは、日本人のオーナーは北京語が出来なくても、中国人の店員を雇うので、中国人のお客さんにも対応できる。「这个多少錢？」(これはいくらですか?)と言う北京語をよく耳にする。故郷を遥かに離れ日本語も不自由な中国人にとって北京語が通用する南京町は自分の故郷のように親しく感じる場所なのであろう。南京町の店主の中には、鮑悦凱さんのような中国と日本の2面教育を受けた第2、第3世代の中国人、あるいは残留孤児の末裔・ベトナム華僑もいる。彼らは今の南京町の中華料理界を支え、若い感性がいろいろなことに挑戦することによって新しいことを産み出していくに違いない。



地区図

神戸南京町の形成と変容

第9表 南京町商店街業種構成一覽表

南京町商店街組合による資料と現地調査により主要な店舗をあげた（平成8年9月1日）

分類	地区別	A地区	B地区	C地区	D地区	E地区	計
飲食店	中華料理	老祥記 東方味工房 昌園 美麗路庵☆ 東栄酒家 蓮△ 日光△	雅苑酒家 楽園 東紅△	攤販街 民生 龍郷	燕楽 敦睦 楽園酒家 翠鳳 栄和飯店 劉家莊 南翔 YUN YUN	長江 北京菜館 海星 群愛飯店 上海飯店 皇蘭☆ 天神閣 雅苑酒家本店 鹿鳴荘	30
	ラーメン ギョウザ	具留面☆	ぎょうざ てんぺん△△ ぎょうざ死△△			大学ぎょうざ△△ 南京町 ラーメン店△△	5
	日本料理	いくた家☆		武寿司☆ うなぎ横丁☆ スギノキ△△	とんじん☆	神戸コロケ☆ 栗花落△△ みやた△△ 弘寿し△△	9
	西洋料理	伊藤グリル☆		サンゼール☆	キッチン☆		3
	韓国料理			ビビンバ☆			1
	インド料理					ラジャ☆	1
喫茶店	コム・シノア☆ カフェド・アルフィー☆		はた珈琲店☆ 花葡萄珈琲△△	我羅里△△		5	
生鮮食品材料店	豚肉屋		堂記号 和記	益生号	新生公司		4
	鳥肉屋		鳥利商店☆				1
	魚屋	魚勝☆ 森田川魚店☆ 魚平☆					3
	中華材料	東栄商行元町店	森記商行	恵行商行 三木商店☆ 大同行 町田青果店☆	林商店 八百仁商店☆ 広記商行 永昌行	東栄商行栄町店	11
	豆腐・蒲鉾		橋本商店☆		かね福☆		2
酒茶			天仁茗茶	赤松酒店☆ 田中商店☆	大堀商店△△	4	
菓子	クラレット☆	フーケ☆	エストローヤ☆			3	
薬屋	漢方薬店		大王漢方		万盛堂△	2	
雑貨店	中華雑貨	楽園		東栄商行南京町店 方龍△	青年華人工廠△△	東栄商行南京町本店 好好1・好好2 カラカラ貿易	8
	日本雑貨	イクシマヤ☆				箸屋☆ ピエレット☆ MS倶楽部センター☆	4
理容					健へアサロン△△	シロモト理容△△	2
美容				ファンタジー 美容室△△		かとれあ美容室△△ ブーリュ美容△△ みのる美容室△△	4
その他	アルチザンハウス☆ (楽器店) 那保利電器△ あべ化粧品☆	みのや☆ 福岡石油商会☆ 三幸宝飾☆ インパネス△△	奥田商店☆ 景隆行 吉田カメラ☆ 村田仙松堂☆	藤原正治☆ 豊和行 田中工業☆ 木谷貴金属△△	南京町ギャラリー・ 蝶屋△△ 大塚商会☆ 上村花園☆ フィレンツェ☆	19	
合計		22	15	25	25	34	121

注：△は南京町商店街組合に未加入店 ☆は日本人による経営

Ⅳ. 南京町の屋台について

1. 屋台の発想

中華街は屋台が似合うという発想の主は、台湾料理「攤販街」の主人曾野文政氏である。屋台の登場は9年前のことであった。「攤販街」とは台湾語で「屋台街」という意味で、北京語で「攤床街」と言い、「屋台」は「攤兒」とか「攤子」とか「攤售」などの呼びかたもある。

この「攤販」という発想が南京町に登場して以来、屋台は雨後の竹の子のようにぞくぞく現れ、この中国人街に新しい風を吹き込んでいった。

南京町の屋台は13軒あり、次の二つの種類がある。

① 借り屋台

これは南京町にある商店の玄関、入り口の店先を借りて屋台で食品を製造しながら販売する屋台のこと。このような屋台は3軒ある（林商店の店先、那保利電器の店先、大同行の店先）。

② 自家屋台

自分の商店の玄関、入り口の店先を利用して屋台を並べること。このような屋台は10軒ある。

2. 借屋台の場合

ここではまず中華材料店の林商店の玄関に並べられた屋台から述べることにしよう。

この屋台は借り屋台で、見学できる屋台である。屋台の主人はベトナムから来日した華僑で、日本にきて十年足らずの間に南京町で林商店の店先をかりて屋台を出した。この屋台の主な商品は油条（細長い揚げパン）1本200円、芝麻球（胡麻団子）1個100円、豚饅、鳥肉の空揚げなどなど。目の前で大きな中華鍋に沸騰している食用油から揚げ出した油条はぴかぴかと光る。「油条、油条、一根、200块」と時々女性店員の流麗な北京語も響き、観光客を誘う。屋台の回りで見学しながら油条を賞味する観光客を集めている。

もう一つの例として、那保利電器店の店先に並べている屋台をあげてみよう。

那保利電器商店は南京町唯一の中国向けの免税品店である。ソニー、ナショナル、シャープなどテレビ、冷蔵庫、洗濯器から炊飯器、ポット、髭そりなどが販売されており、中国へのお土産として、中国人の間ではよく名が知られている。関西周辺に住んでいる多くの中国人がこの店に故郷へのお土産を求めに来るので供不應求のときもあった。しかし近年来、中国国内の経済発展と輸入品に対する高い課税により、帰国する中国人の

お土産も一般的な家庭用電器から、高級洋服などの免税品に変化したこともあり、この店を訪れる中国人の姿が少なくなった。

しかしながら、この店先で借り屋台が開かれるようになり、再び賑わうようになっていく。この借り屋台の女主人の陳さんは15年前に日本に来た広東人である。この屋台の特色は既製食品の販売である。豚まん、春巻き、麻球、開口笑（ドーナッツ）など十数種類を集めている。この屋台は油を使わず、蒸鍋と鉄板で暖めてから販売している。妻であり、3人の子供達の母親として、平日は主婦業に専念し、土曜、日曜、祭日には、この屋台の主人として、さわやかな笑顔でときに広東語で、ときに北京語で、ときには日本語で、八方の来客を迎えている。陳さんは「家で主人と子供達とはほとんど広東語で、話している。あまり日本語で話すチャンスがないので上手にならないよ。週2回、ここの屋台で働き、日本語、北京語、広東語でお話しができてうれしいです。お客さんが喜んでくれたなら、一番幸せです」と北京語で淡々と話してくれた。

陳さんの姿を通じて異国で奮闘している中国人女性の強さと勤強さを感じた。

3. 自家屋台の場合

「敦睦」は飲茶専門店の自家屋台である。芝麻球（胡麻団子）、骨頭香腸（豚肉の骨付きソーセージ）、小包子（小さな豚饅）など、10種類以上の甜点心（甘い菓子）、咸点心（甘くない菓子）が並んでいる。点心は店内の厨房で作り、屋台で販売する、すべて手作りの本物が評判を呼んでいる。

「攤販街」の屋台も自家屋台。南京町の名物の一つになった刈包はその屋台のヒット商品である。刈包（一個200円）とは豚肉の角煮と高菜漬をあっさり甘い皮に挟み、バーガー感覚で食べられる。これは中国風漢堡包（中国風ハンバーガー）と言える。

南京町の東の入り口、長安門をくぐった左手に美麗路庵という店の屋台は土、日曜にはいつも順番待ちの列が並んでいる。手のひらに乗せるカップサイズのわんこら一めんと、串刺しにした鶏の空揚げが若者に歓迎され、大人気を呼んでいる。

南京町の屋台は、中華料理を主流として若者に親しまれている。その特徴の一つは自家製、自己流が多い。二つめは立ち食い、歩きながら食べられる物が多いことである。立ち食いのわんこら一めんと空揚げ、歩きながら口に入れることができる油条、芝麻球、中国風ハンバーガーの刈包などは若い観光客の人気を集めている。しかし南京町の屋台については、町の中でも賛否両論があることも事実。

4. 屋台についての両論

屋台の誕生は南京町に多くの観光客を呼んだことは事実であるが、屋台のあり方について地元、商店主、観光客から聞き取りをしたところ賛否の両論が寄せられた。

まず、賛成派の意見をあげておこう。

「屋台の食べ物を買って歩きながら食べられるのが魅力になってお客さんも増えた」とある商店主。「地震後、屋台が大助かり、すぐ営業できた」とやはりこれもある商店主。「たまに、歩きながら食べると格好がいいじゃないか」、「お店に入らなくても屋台の食べ物でお腹がいっぱいになるよ」、「屋台の食べ物は結構豊富でおいしいし、値段も余り高くない、いいじゃないか」とある観光客。賛成派はこのように語ってくれた。

要するに屋台の持つ①経済性と②利便性がこれを支持する人々にとって大きな魅力となっているのである。ことに震災後の店の立ち上がりの面については、屋台は大きな力を発揮したものである。

ところで、屋台について疑問を持つ人の考えも次のようである。

- ①安全面 作りながら販売する屋台はほとんどプロパンガスを使い、油を使うので危険性を避けることが出来ない。
- ②衛生面 露天で作り、出来た食べ物をそのまま放置して販売することは清潔感に欠ける。
- ③商売面 立ち食い、食べ歩きでお客さんが満腹になって、料理店に入らなくなるので収入減少の苦情もある。
- ④節度面 お客さんには、食べ歩きは節度とモラルが低下する。
- ⑤環境面 店頭で屋台を出して、通りが狭くなる。動けないほど観光客が多い土、日曜は特に危険性がある。

激しい競争の中に誕生した南京町の屋台は豊富、潤沢、安価で買えるところが魅力であるが、安全面、衛生面の不足もまた否定できないところであろう。安全、衛生である屋台作りはこれからの南京町の発展にとって重要な課題になるであろう。

V. 女子大生からみた神戸南京町

神戸南京町は女性に人気があるが、その中でも特に若い女性はこの街をどのようにとらえているのであろうか。ここでは大手前女子大学の学生に対するアンケート調査の結果から、中華街に対する意識を明らかにしておきたい。

(1) 人気の高い中華街

神戸南京町を訪れたことのある学生は210名中の165名（1度も行ったことのない学生は30名）で、実に79%を占める。しかも5回以上行っている者は42%、さらに10回以上という学生が22%も存在するのである。中には50回以上という学生も数人おり、地元と言うこともあって、神戸南京町の人気の高さが示されている（第10表）。

さらに横浜中華街、長崎中華街、外国の中華街を訪れた学生も5～8%おり観光コース

神戸南京町の形成と変容

第10表 女子学生中華街来訪回数

	1回	2～4	5～9	10～	合計
神戸	39	57	33	36	165
横浜	—	—	—	—	18
長崎	—	—	—	—	14
外国	—	—	—	—	12

(1996年7月大手前女子大学学生に対するアンケート調査による)

として大きな地位を占めていることが理解されよう。さて、一度行けばそれきりで、それ以後はあまり行く気がしないという、いわゆる一般の観光地とは違って、何度も人を引きつける不思議な魅力を中華街はもっているのである。すなわち「何回でも中華街を訪れたい」とする学生が87%もいることがそれを裏づけている。このように学生達は常連客とも言えるのであり、中華街の町づくりにとって重要な存在となっているのである。

では、学生達は中華街のどこに魅力を感じているのであろうか。「雰囲気」がトップを占め、次いで「味」をあげた学生が圧倒的多数を占めた。「買い物」、「行きたい店がある」とする者の比率はそれほど高くはなかった(第8図)。

要するに学生達は中華街の魅力として、日常生活から遊離した異空間の雰囲気を楽しみながら、中華料理を食べ歩き、さらに中国雑貨の店を回ってみることにつまぶるのであろう。

ただし、これとは反対に「何回も中華街に行きたくない」と答えた学生も13%おり、少数派ではあるが神戸南京町に失望した学生も存在する。その理由としては、「町の規模の小さいこと」あるいは「中華街で、一度入った店がまずかったので」をあげたものでいた。

そこで次に神戸南京町について、学生達が改善してほしいと考えている点について、検討してみよう。学生達があげた中で最も多かったものは「町の規模が小さいこと」であった。これは物理的な問題であり、最も実現の困難な要望ではあるが規模の拡大を望んでいるものが多い。ついで「街の美化」があげられており、より一層のきれいなまちづくりが望まれているのである。また中華料理店の「値段」についても高いと感じている学生がかなりの数で存在する。

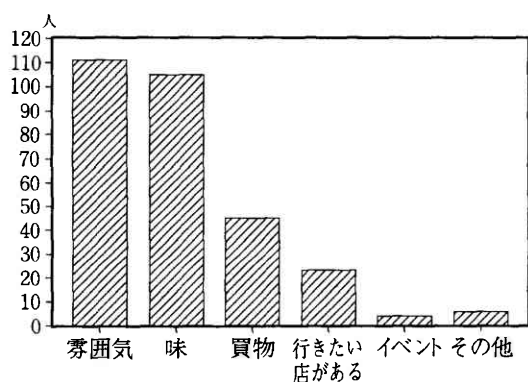
さらに「トイレ」、「何回も行きたくなるような店」、「案内標識」、「サービス」、「駐車場」などに改善を求めている。ただしこれらの点については後述することにした。

(2) 女子大生からみた南京町の魅力

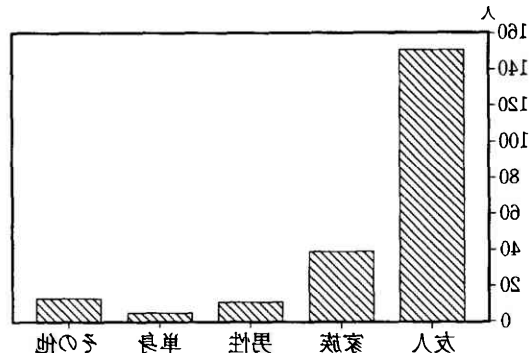
①精神衛生上の効果

中華街のあの独特の雰囲気は、日常生活のストレスの解消に大きな効果を与えるものであるらしい。「中華街大好き」(9人)、「別世界に来たようなあの雰囲気が良い」(5人)

神戸南京町の形成と変容



第8図 南京町の魅力



第9図 南京町来訪の際の同行者

「歩いている人が皆楽しそうな顔をしているので、こちらも自然と楽しくなる」、「中華街を歩いていると友達との会話がはずみ、親交が深まる」、「店員が気軽に話してくれる」などの意見が目だっており、精神衛生上に与えるプラスの効果は極めて大きいものがある。

②学生に好まれる食べ物

「おいしい食べ物の店が多い」(6人)、「作りたての物をその場で食べられるのがうれしい」、「いい匂いを嗅ぐと幸せになれる」など食べ物の味を評価する学生が多い。具体的に名前のあげられた人気のある食べ物は豚まん・胡麻団子・ラーメン・焼き豚・串刺しのから揚げ・桃まんじゅう・アイスクリームのフライなどである(第11表)。また中華料理ではないが、中華街にある神戸コロッケ、神戸プリンも好評である。

③人気のある屋台

「屋台は価格も安くて最高」(6人)、「食べたい量だけ食べられる」、「お店で食べると中華街の雰囲気が味わえない」「親と行くときは店、自分で行くときは屋台」など、学生達は屋台を楽しんでいる。

しかし小数ではあるが「屋台は落ち着かない」、「衛生面の心配」、「消防上の不安」という意見もあった。学生達は価格も手軽に食べられる屋台を巡り歩きながら、友達との親交を深めているようである。

④友人と気軽に楽しむ街

南京町は食べる街でもあり、女子学生達は女性の友達と一緒に訪れることが多い。「家族で行くときは少し豪華に、そして帰りには三ノ宮センター街で服を買ってもらうことも」。また「よく食べる人と行く」など食べながら歩くことが多いので、気の

第11表 中華街で女子学生に人気のある商品

	買ったことのある物		買いたい物	
1	豚まん	50人	豚まん	24人
2	ゴマダング	25	中国服	24
3	中華料理材料	9	中国茶	12
4	中国茶	8	陶器	5
5	中華饅頭	6	アクセサリー	5
6	中国酒	6	お香	4
7	神戸コロッケ	6	漢方薬	3
8	神戸プリン	5	中華料理材料	3
9	ラーメン	5	シュウマイ	3
10	ちまき	5	置物	3

(アンケート調査による)

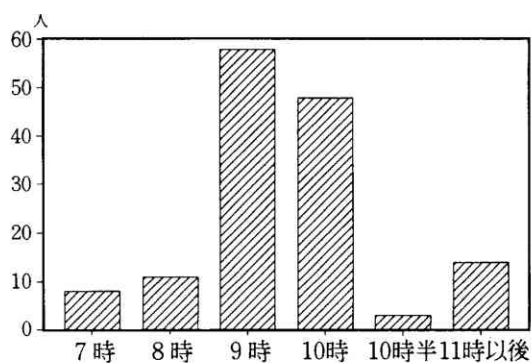
張らない間柄の友人と普段着感覚で訪れる街と位置づけている（第9図）。

ところで、街をブラツキながら中華雑貨などの店を見て回るわけであるが、女子学生の買いたいもの（希望）の主なもの・豚まん・中国服（チャイナドレス、カンフー着、人民服）・中国茶・陶器・アクセサリ・お香などであった。

このように気軽に訪れる街であることから、閉店時間の延長を望む声も多い。7時頃に閉まる店が多いので、やむなく帰る人も多い。学生達の望む閉店時間は9～10時が多い。また「土・日曜だけでも9時頃まで営業してほしい」も数人いた（第10図）。夜型人間の多い時代を反映した傾向と言えよう。

⑤新しい観光スポット「臥龍殿」（市民トイレ）

アーバンリゾート'93に合わせて、本格的な中国建築である観光トイレ「臥龍殿」が1993年4月に完成した。総工費7000万円で、2階は文化センターとして、利用料を維持管理費用に当てている。一階部分には龍を展示し、壁の部分には「九龍壁」を張り巡らせている。新たな観光スポットとなった「臥龍殿」は一日三回清掃され、トイレトペーパーの使用料は月平均250巻（1巻55m）、水道料は7～8万円となっている。「臥龍殿」は一部の学生には好評ではあるが、残念ながら場所が判り難い事もあってあまりこのトイレが知られていない。したがって「トイレが無い」とした学生もかなりいた。トイレの利用について再検討が必要となってくるであろう。ともあれ、このトイレが神戸南京町の新しい観光スポットとなりつつある¹³⁾。



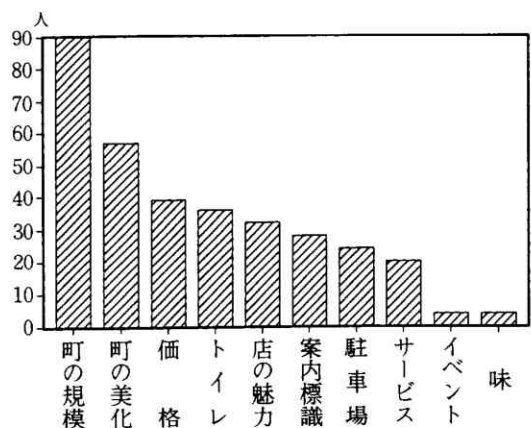
第10図 学生が望む閉店時間
（アンケート調査による）

(3) 女子学生から見た南京町の問題点と今後の課題

総体的に見て女子学生は南京町に対して好意的であるが、その反面南京町を愛するが故の注文も多いようである。中にはいささか厳しい意見もあるが、代表的なものを紹介することにしよう。

①街の規模

神戸南京町は街の大きさという点において、かなり期待を裏切られるようである。「テレビや新聞で大きく取り上げられる割には街が小さい。横浜中華街と比較



第11図 アンケートよりみた南京町の問題点

して余計にそう思う」、「小さいころは街の大きさは気にならなかったが、成長するにつれて小規模であることが気になるようになった」、「屋台を食べ歩いているうちに、すぐ町の外に出てしまったので残念」などの意見が出た。さらに「もう少し店を増やしてほしい」、「混雑する割には道幅が狭い」という声もあった。物理的には規模の拡大は解決困難な問題ではあるが、イメージが先行した街づくりに対する率直な声としてとらえる必要がある。

②求められる「きれいな街づくり」

「街が美しくないという思い込みがあるので、きれいな街づくりをしてほしい」、「最近ずいぶんきれいになったが、ちょっと路地に入ると汚いところや悪臭（下水道の不備か？）を放つ場所があり、徹底されていない」など街に美化を求める学生が多い。

さらに大量に出されるゴミの処理についての苦情も多かった。「観光客の数と比較してゴミ箱が少ないのですぐに満杯になり、箸や容器が散乱しておいしさが半減する」、「屋台を食べ歩くので、どうしてもゴミが多く出る」。要するにゴミ箱の設置だけでなく、清掃など街全体のメンテナンスの重要性が指摘されたものであろう。

③味とサービスに関する問題

南京町の味に関しては、大きな魅力の一つとして学生達には概ね好評であった。しかしその反面でかなり厳しい意見も出された。「以前と比べておいしい店が減った(数え切れないほど中華街を訪れている学生)」、「手作りをしている店が少なすぎる、豚マンを手作りしている店は私の知る限り2軒ぐらいか。冷凍に頼らず本当の味を楽しませてほしい」、「手抜きをしないでほしい」、などが主なものである。

また「中華街という名前だけで観光客が来るので、味やサービスの面で劣っている。むしろ単独で中華料理店を経営している店のほうが細かいことに気配りがあった」などの意見は、ともすれば集積の利益に安住してしまいがちな現状を示唆しているとも言えよう。

一方価格面についても、より一層のサービスを求める声が強かった。

④街の快適性の問題

南京町は長時間滞在して楽しもうとする観光客にとっては、少しばかり不便な所である。「屋台で食べ歩き、疲れたときに気軽に座れる場所（広場、カフェテラスなど）が無い」、「雨が降ると、しのぐ場所が無い」、「真夏に街を訪れると日光を避ける場所が少ないので大変である」。

このように、食べ飲み歩く街にしては気軽に休める場所が少ないのである。今後は暑さと雨天対策が少なからず必要になってくるであろう。

⑤より個性的な店・街づくりへ

中華街はそれ自体非常に個性ある景観であり、訪れる人を魅了するものであるが、個々

の店を見た場合、意外と没个性的に写るものである。

「この店に入りたいと思わせる店が少ない」、「どの店も同じように見えるので各店で、もう少し特色があってもいいのではないか」。これらの意見は少々贅沢とも考えられるが、中華街の内部において、来訪者にもはっきりと理解できるような個性化、他の店との違いを主張できる店・街づくりが望まれているのである。

⑥他の中華街と比較して

国内あるいは海外の中華街と比較した場合、神戸中華街はどのようにとらえられているのであろうか。

「街の規模、活気、などの点で、横浜中華街より若干の見劣りがする」ところは否定できないところであろう。しかし「街の規模はそれほど大きくなくても中身の濃いサービスの充実した活気ある街であってほしい」という意見もあった。

そしてそれを実現するためには、「どこの中華街に行ってもよく似ているので、神戸中華街は神戸らしい、あるいは神戸にしかない特徴が出せないものか」。

たとえば「アメリカの中華街のように道路をユニークなタイル張りにするなど、もう少し工夫してほしい」という意見は、中華街により一層の付加価値を求めたものであろう。

さらに「中華街の特徴を行かしつつ、特にアジアのさまざまな情報を発信する場所であってほしい」。中華街に行けば、マスメディアなどを利用して中国の生活文化を理解出来ることになれば、より有益な街となってくるのであろう。

日本における中華街は紆余曲折を経ながらも、近年は多くの人に愛され有力な観光地としての地位を築きつつある。中華街は常連の客とも言えるべき人々でにぎわっている。それだけに中華街に期待するものもまた大きいものがある。今後は各中華街が各々の特徴を前面に押し出ししながら、個性ある発展が望まれるところであろう。

おわりに

神戸南京町はその形成過程において、成長、衰退、再興を繰り返しながら懸命の街づくりの努力に支えられて、今日の繁栄を見るに至った。現在の神戸南京町は中国人の住む街としてよりも、特異な景観を有した街として、中国文化と日本文化の接点としての役割を担っている。中国人同士は言うに及ばず、日本人同士、あるいは中国人と日本人が相互に依存し、そして競争することが神戸南京町の更なる発展の原動力となるであろう。神戸南京町は中国人にも日本人にも愛される街として、多くの人を魅了し続けている。あの独特の雰囲気がかまらなく人を引きつけるのである。しかしながら情報の国際化、価値観の多様化の進行する中で、南京町も伝統を継承しつつ、変容を迫られること

になるであろう。今後は地元の人はもちろん、南京町を訪れる人々も協力しながらより質の高い街づくりが望まれている。

神戸南京町は、女子学生の人気が大変高く神戸の重要な観光地として、また心から楽しめる場所として位置づけられている。しかし観光客の増加にともなって様々の問題点が指摘されていることも事実である。

神戸南京町は他の中華街と共存を図りながらも、この街にしかない神戸の特色を活かした、個性のある街づくりが必要となってくるであろう。そして内部においても、中華街としての集積の利益に安住することなく、それぞれが競争しながら、その店独特の雰囲気のある店づくりが求められているのである。

また今後は、中国的な様式の中にも国際的な要素を取り込んだ街となって発展していくであろう南京町は、その特性を活かした情報センターとしての機能も重要となってくるものと考えられる。

そして、南京町は神戸の海岸に飾られた宝石のように、何時までも美しく異彩を放ち続けていく事であろう。

注及び参考文献

- 1) Gil Litz; Portland's East Asian Connection (edited by Larry W. Price; Portland's Changing Landscape, 1987) pp. 121-135.
- 2) 山下清海「横浜中華街在留中国人の生活様式」、人文地理31-4、1979、33-50頁。
- 3) 高橋正明「都市と農村の交流による地域の活性化」、大手前女子大学論集20、1986、148-171頁。
- 4) 当時、中国が清政府に統治され、中国人は清国人と呼ばれた。「神戸統計書」神戸市市役所
- 5) 鴻山俊雄「神戸大阪の華僑」華僑問題研究所 1979。
- 6) 「神戸市開港三十年史」(下巻) 神戸市開港三十年記念会、原書房 1974。
- 7) 神戸統計書によると、明治34年の神戸外国人人口は清国人1,767人 英国人496人 独国人1,170人 その他224人 合計2,803人。
- 8) 神戸統計書によると、大正14年の在神戸外国人の総数は7,194人。
- 9) 南京町振興組合「南京町沿革」。
- 10) 鴻山俊雄「神戸と在留中国人」東西文化 昭和28年。
- 11) 南京町振興組合「南京町振興組合診断調査」昭和62年。
- 12) 陳舜臣「神戸辺ものがたり」平凡社 1989。
- 13) トイレについては、高橋正明「トイレからみた環境問題」大手前女子大学論集28号、1994

参考書

鴻山俊雄「海外の中華街」華僑問題研究所 昭和58年
戴国輝編「もっと知りたい華僑」弘文堂 平成3年
神戸新聞社編「素顔の華僑」人文書院
藤岡ひろ子「神戸の中心市街地」大明堂 昭和58年
菅原幸助「日本の華僑」改訂版 朝日文庫 朝日新聞社1991
堀 博、小山石史郎訳「神戸外国人居留地」

神戸南京町の形成と変容

岸 百艸「南京町の半世紀」歴史と神戸第2巻、別冊1、1963